

博士論文要旨

— 日中指示詞の対照研究 —

第2部門 史シヤク

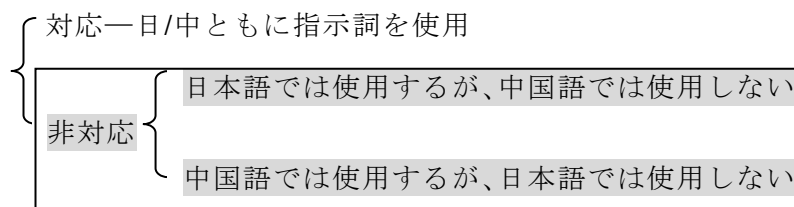
1 研究目的

日本語の指示詞が「コ・ソ・ア」三系列であるのに対して、中国語の指示詞は近称の“这”と遠称の“那”の二系列からなる。今までの指示詞に関する日中対照研究では、“这・那”の二系列と「コ・ソ・ア」の三系列の使い分けがずれていると指摘されてきた。

指示詞は日本語でも中国語でもかなり難しい分野である。日本国内では指示詞「コ・ソ・ア」の研究が盛んである。中国国内でも指示詞“这”と“那”に関する研究が注目されている。しかし日本語のみでの「コ・ソ・ア」に対する研究と中国語のみでの“这”“那”に対する研究にはそれぞれ限界があり見えないところがある。そこで両者を対照し、お互いを鏡にすることでそれぞれの持つ特徴や機能を探る。つまり対照研究の手法を用いて日中指示詞のそれぞれの特徴を分析することが有益であると考えられる。

2 研究対象

この論文では、日本語と中国語指示詞の使い分けではなく、従来とは異なる「そもそも指示詞を使うか使わないか」という視点から日本語と中国語の指示詞の比較対照を行う。それから日中指示詞の各自の言語での位置づけ及びその独自の機能を探る。



3 研究方法

以上の観点に基づいて、例文を下記のように収集し、分類作業を行った上、各分類に関して日中指示詞の機能を分析し、具体的に検討する。

① データ収集

- a. 中日・日中対訳小説から“这”“那”形式と日本語では「コソア」表現の例文を集める。
- b. 中日・日中対訳小説から日本語で「コソア」表現と中国語では“这”“那”形式の例文を収集する。
- c. 日中・中日対訳小説以外に日本語と中国語の言語資料を収集する。

② 分類：二段階の作業を実施

- a. 収集したデータを現場指示と文脈指示に分類する。
- b. 現場指示と文脈指示において中国語では指示詞“这”“那”形式が用いられるが日本語では指示詞「コソア」形式が用いられない構造と日本語では指示詞「コソア」形式が用いられるが中国語では指示詞“这”“那”が用いられない構造に分類する。

③ 分析：各グループを具体的に分析

- a. 各グループの日中指示詞の用法を検討する。
- b. 例文を用い、具体的に説明し結論をまとめる。

4 先行研究との理論づけ

この論文では先行研究などの既存の理論に基づいてそれらの理論を発展的に応用する。先行研究から見れば、日本語指示詞の研究は対立関係からの研究であれ、話し手と聞き手が持つ情報という観点からの研究であれ、「談話管理」観点であれ、研究の中心は指示詞「コ・ソ・ア」三者の使い分けに重点が置かれている。また、中国語指示詞の研究は主にその機能と構造を中心として研究していると日本語と異なる方向に進んでいることが見受けられる。日本語指示詞の先行研究と中国語指示詞の先行研究の重心が異なるが、この論文では、両者の成果を有効に活用し、新たな結論に結び付けられた。

- ① 現場指示において、先行研究で中国語指示詞は指示の力が弱まっている「虚

化」用法があると指摘されている。それを踏まえて、弱まった指示用法以外にも別の役割を果たしていると明らかにし日本語指示詞と対照する。

- ② 文脈指示において、先行研究で日本語指示詞「その」の「持ち込み」機能が明らかにされている。それを踏まえて、さらに詳しく分類し、中国語指示詞と対照する。

5 各章の内容

5.1 現場指示

現場指示では基本的には対話・講演など話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において多くの場合、身振り・手振り・表情などを伴う指示である。この論文では現場指示における中国語では指示詞の使用が必須となる三つの側面を取り上げ、日本語と対照し、その由来を考察した。表(1)で示したように、日本語では、使用しないか必須ではないかという結論となっている。

表(1) 現場指示における指示詞がさす事柄と日中指示詞の働き

構造	中国語指示詞	関係	日本語指示詞
「N1+指示詞 N2」 (第4章)	文脈に現れていないが、話し手の頭の中(記憶)に存在している具体像を指す。 (必須)	非対応 ⇔	用いることが出来ない
「指示詞 QP」 (第5章)	強調機能 (必須)	非対応 ⇔	用いることが出来ない
	概数機能 (必須)		用いることが出来ない
複数の修飾要素を含む名詞句 (第6章)	位置によって強調する部分が変わってくる。 (必須)	非対応 ⇔	位置によって修飾する対象の違いがなし (必須ではない)

第4章では、中国語「N1+指示詞+N2」構造において指示詞に先行する名詞表現N1と、それに後続する名詞表現N2の指している事物が同一事物か否かによって「同格構造」と「所属構造」に分けられる。この章では、両構造の意味と指示詞の役割を具体的に分析した。両構造とも話し手は「ある事物」の具体的な出来事(具体像)を指しながら、それに強い感情を表す構造である。指示詞は指示の力が弱くなっており、「指示詞の虚化(助指)」現象の一種となる。また、中国語「N1+指示詞+N2」の両構造に対して日本語は「N1+という+N2」「N1+の+N2」形式と対応している。いずれも指示詞が現れていないことから、日本語の指示詞は中国語「N1+指示詞+N2」構造における指示詞の用法を持っていないわけである。

第5章では、中国語では、同じ「指示詞+数量詞+名詞」構造においても指示詞は二種類の異なる用法を持っている。一つは数量の程度を強調する「強調の指示詞」であり、もう一つは「数量を程度化する」機能を果たす「概数の指示詞」である。「概数の指示詞」は「強調の指示詞」の機能が虚化され、指示詞の機能が失われ、派生されたものである。また、日本語においては「強調の指示詞」と「概数の指示詞」に対して、いずれも指示詞での対応ができない。「強調の指示詞」の機能に対して副詞などで対応し、「概数の指示詞」の機能に対して、概数表現「ぐらい」「ほど」が担っている。

第6章では、二つの修飾要素と指示詞を含む名詞句は、修飾要素と指示詞の位置により、[指示詞先頭型][指示詞末尾型][指示詞中間型]の三種類がある。日本語指示詞も中国語指示詞も、指示詞先頭型(D+M+M+N)、指示詞末尾型(M+M+D+N)、指示詞中間型(M+D+M+N)の三つの構造に用いられるが、その中での指示詞の機能は異なる。中国語では三つの構造において指示詞は「特定化する機能」であれ、「区別する機能」であれ、「具体像を指す機能」であれ、いずれも現場指示の用法である。三つの構造ともそれ相応の意味とニュアンスを表したいのであれば、指示詞は必須である。一方、日本語では指示詞の強調機能は現場指示の用法であるが、「その」の「照応用法」は文脈指示の用法となる。

以上のように、現場指示において物を指す言葉として指示機能以外に日中指示詞はさまざまな機能を持ち、この論文で挙げられているような非対応の場合もある。比較した結論から見れば、現場指示において中国語指示詞の諸機能に対して、日本語指示

詞は持っていない傾向がある。

5.2 文脈指示

文脈指示とは現場ではなく、会話や文中に先出した人・物・事物などに言及する際に用いられる場合である。文脈指示において本文では主に照応用法について考察した。日本語の照応用法の「その」は、照応の仕方によって「外延レベルの照応」と「内包レベルの照応」に分類できる。第7章では具体的に「内包レベルの照応『その』」は中国語との対照は議論した。

結果は表(2)のようになる。

表(2) 文脈指示における指示詞がさす事柄と日中指示詞の働き

照応用法の「その」	日本語指示詞	関係	中国語指示詞
内包レベルの照応 (第7章)	持ち込み機能 (必須)	非対応 ⇔	用いることが出来ない
	言い換え機能 (必須)		用いることが出来ない

第7章では、日本語では「内包レベルでの照応」の「その」は照応の仕方に基づき、「持ち込みの『その』」と「言い換える『その』」とに分かれる。この分類を踏まえて、中国語指示詞照応用法との相違を分析し、日本語の「その」に対して、中国語では「内包レベルでの照応」の用法を持たないという結論が得られる。類型を表す指示詞を使用するか、第1文脈から持ちこまれた内容を第2文脈で明示するかになる。

日中指示詞は一見類似しているように見えるが、そもそも各自の言語の中では異なる役割を果たしている。この論文の考察結果からみれば、両言語の中で中国語指示詞は現場指示の分野の働きに偏り、一方、日本語指示詞は主に文脈指示のほうに働いていると言えよう。

6 まとめ

この論文では、対照研究の手法を用いて「対応—非対応」という視点から日中指示詞の機能を考察した。考察結果によって、中国語指示詞は日本語指示詞と比べ、特に現場指示において当言語の中では日本語指示詞の持っていない機能を果たしており、より多くの役割を果たしていると見られる。今後はこの推測が検証できるように、さらに、多くの「対応—非対応」という視点に焦点を当て、日中指示詞を対照、分析する。そして、その結論の上で、日本語の指示詞(接続詞は除外)は日本語の中での位置づけを考察する。最終的に、日本語教育現場に貢献できるような成果を作りたいと思っている。